

◆長年住んでいる町内に、看護婦長のお嫁さんが来た。その当時勤めていた病院で、母と夫が最後の看取りで大変お世話になった。その後、婦長さんに女の子が生まれて、両親共通の恩師が「千恵美」と命名して下さったと伺っている。その頃から「ちいちゃん」と言って折にふれて可愛がってきた。母の跡について同じ病院で働くようになったちいちゃんが、先日結納があったと言って、婚約指輪を見せてくれた。実家の近くに新居が決まったとの嬉しい知らせもあった。結婚する年齢になっても私の中ではいつまでも可愛いちいちゃんである。婆々と言って労ってくれる優しい看護師になった、ちいちゃんがお嫁さんになることを喜んでいる。

市川茂子

◆未知との遭遇 ―ハタネズミ― 四月のある日、玄関わきの草叢から茶色の小動物が現れた。体長13〜14センチ程、体も顔も丸く眼に野生の警戒色がなくどこか稚い。腹をひきずり這うように二、三步あるいては顔を伏せ蹲る。よほど眠いのか。古い子どもたちの凶鑑によるとハタネズミらしい。日本固有種。ネットには画像がたくさんあった。県と市の農業関係部署では「害獣対策で鼠の種類を意識していない、ハタネズミもいるだろう」との回答だった。

梅津純子

◆苺のコンパニオンプランツには大蒜がいいとネットにあったので、昨年の秋、苺と苺の間に青森大蒜を植えてみた。虫除けになるとは半信半疑であったが、効果抜群で例年より多く苺が収穫できた。それよりも何よりも苺畑に植えた大蒜の成長が抜群で、ころころと肥っている。思わぬ効果に顔もほころぶ。「大蒜や露の滴る若芽挽ぎ（季重なり）」

神村ふじを

◆記録的大雨というにおそわれた。もう先日のことになる。市内で時間一〇〇ミリの雨は、初めて。夕刻、落雷が降り始めた。四階からは道路の冠水状況をみるのみなので、階下において、団地構内水路ぞいをみにいった。構内一部で冠水状態、水路も水が（あふれる）ギリギリの状態。水路は、どこでつまっても大変なことになるとおもう。水がなんとかはけている状態、これがつづくかどうかだった。市内に避難指示が次々に出されていった。じぶんは、〈キキクル〉（気象庁の危険度分布）を注視する。それによると同じ市内に偏りがあった。そのなかにいると、はやく通りすぎないかなとおもうことしかできない。結果的に六時間余りのことだった。

小野澤繁雄

◆最速の梅雨明けと予報士が言っている。六月中に東北部まで梅雨が明けた。コロナ禍での外出制限はあるものの、今年の雨傘を買いたいと思っていたが、これでは日傘になる。過激な気象の変化に対応できないのは高齢のせいばかりでもなさそうだ。自然災害として先ずは自分の身は自分で

守るしかない。

河村郁子

◆気持ちが開放的になる夏の季節です。けれども、ウクライナでの戦争が続いていて、ヨーロッパ全体に重い空気がのしかかっています。これから日常生活への影響もますます目立ってくるでしょう。ウクライナへの理不尽な侵略が一刻も早く終結することを願っています。     ギンジツク恭子

◆この三カ月ほど、しきりに四十三年前のソ連旅行のことを思い出している。言わずもがなロシアがウクライナに軍事侵攻したからだ。モスクワのクレムリンにもキエフの聖ソフィア寺院にも、カザフスタンとかウズベキスタンあたりからの修学旅行の少女たちがいた。黒い瞳と黒い髪、彫りの深い面立ちは一際目を引いた。モスクワにあるキエフ行き駅名はキエフ駅、キエフにあるモスクワ行きの駅名はモスクワ駅というように、共和国同士の強い結び付きが感じられた。モスクワやレニングラードと違って、キエフの市街地の標識はキリル文字よりアルファベットが多かったと記憶している。村上龍の小説が好きだと言っていたガイドのバロージャは今いずこ？ 『罪と罰』の舞台となった町並みはそのままか？ などなど取り留めもないことを考える。また、数年前観たウクライナ映画「ザ・トライブ」のこと。登場人物はすべて聾啞の人たちだった。あの青年たちは徴兵されることはないだろうけれど、どうしているのだろう。ウクライナ侵略戦争はいつまで続くの

か、これから世界はどう動き変わっていくのか。情報の洪水に足をすくわれそうだ。ただただ殺し合いは一刻も早くやめてほしい。

新野祐子